



「I was born」

吉野 弘

確か 英語を習い始めて間のない頃だ。

或る夏の宵。父と一緒に寺の境内を歩いてゆくと 青い夕靄の奥から浮き出るように、白い女がこちらにやってくる。物憂げに ゆっくりと。

女は身重らしかった。父に気兼ねをしながらも僕は女の腹から眼を離さなかった。頭を下にした胎児の 柔軟なうごめきを 腹のあたりに連想し それがやがて 世に生まれ出ることの不思議に打たれていた。

女はゆき過ぎた。

少年の思いは飛躍しやすい。その時 僕は<生まれる>ということが まさしく<受身>である訳を ふと諒解した。僕は興奮して父に話しかけた。

--やっぱり I was born なんだね--

父は怪訝そうに僕の顔をのぞきこんだ。僕は繰り返した。

--I was born さ。正しく言うと人間は生まれさせられるんだ。自分の意志ではないんだね--
その時 どんな驚きで 父は息子の言葉を聞いたか。僕の表情が単に無邪気として父の眼にうつり得たか。それを察するには 僕はまだ余りに幼かった。僕にとってこの事は文法上の単純な発見に過ぎなかったのだから。

父は無言で暫く歩いた後 思いがけない話をした。

--蜉蝣という虫はね。生まれてから二、三日で死ぬんだそうだが それなら一体 何の為に世の中へ出てくるのかと そんな事がひどく気になった頃があっただけね--

僕は父を見た。父は続けた。

--友人にその話をしたら 或曰、これが蜉蝣の雌だといって拡大鏡で見せてくれた。説明によると 口は全く退化して食物を摂るに適さない。胃の腑を開いても 入っているのは空気がばかり。見ると、その通りなんだ。ところが 卵だけは腹の中にぎっしり充満していて ほっそりした胸の方にまで及んでいる。それはまるで、目まぐるしく繰り返される生き死にの悲しみが 咽喉もとまで こみあげているように見えるのだ。淋しい 光りの粒々だったね。

私が友人の方を振り向いて <卵>という 言葉も 背いて答えた。 <せつなげだね>。そんなことがあってから間もなくのことだったんだよ。お母さんがお前を生み落としてすぐに死なれたのは--

父の話のそれからあとは もう覚えていない。ただひとつ痛みのように切なく 僕の脳裡に 焼きついたものがあった。

--ほっそりした母の 胸の方まで 息苦しくふさいでいた白い僕の肉体--

(詩集『消息』1957年刊) より

「受身形で始まった私たちの人生」

校長 筒井 啓介

皆さんは英語の授業で、「生まれる」を I was born. と表現すると習いましたね。文法的には「受身形 (受動態)」です。直訳すれば「私は産ませられた」となります。

詩人・吉野弘さんの代表作に「I was born」という作品があります。この詩の主人公である少年は、習いたての英語の授業をきっかけに、「人間は、自分の意志で生まれてくるのではない。産ませられる存在なのだ」という事実気づきます。

■「受け身」から始まる人生の重み

詩の中で、少年は父親から、自分の誕生と引き換えに亡くなった母親の話を聞かされます。私たちは、誰もが自分の意志でこの世を選んで来たわけではありません。自分の容姿、家族、環境。それらはすべて「受動的」に与えられたものです。時には「どうして自分はこうなんだろう」と、その現実にも悩むこともあるでしょう。しかし、この詩が教えてくれるのは、その「受身形」の裏側にある強い意志です。あなたが「産ませられた」ということは、誰かがあなたをこの世界へと「産み落とした」ということであり、そこには誰かの命がけの願いや、繋いできたバトンが存在しているのです。

■生きる意味を「つくる」

中学生という時期は、自分という存在が分からなくなったり、将来に不安を感じたりする時期です。人生が「受動態」で始まったことは、私たちの責任ではありません。ですが、その「与えられた命」をどう使い、どんな物語にしていこうかは、これからの皆さんの意志にかかっています。「なぜ自分は生きているのか」という問いに、すぐに答えを出す必要はありません。ただ、自分が多くの存在によって「生かされている」という重みを感じたとき、目の前の景色は少し違って見えるはずですよ。

皆さんが、自分だけの「I was born」の続きを力強く書き進めていくことを願っています。



省略